

< 沖縄戦体験談 >

痩せこけた兵隊とコロコロ太った蛆

垣花秀子(現・吉村秀子)当時十九歳

独歩患者を三十名程収容した壕に配置されましたが、独歩患者とは名だけで二人の他は皆身動きも出来ない重傷患者でした。足を切断した人 手の無い人 内臓被弾で時間おきにマッサージしないと紫色に冷たくなる人 頭に負傷し脳症になった人などで壕はいっぱいでした。

ここに着いてじきの驚きは忘れることは出来ません。「学生さん」と患者が弱々しい声で呼ぶので行きましたら片足を膝上部で切断され幾重にも巻かれた包帯は痛々しいくらい一面にどす黒い血で汚れています。

「痛くて堪らない何かは傷口を噛んでいる開けて見てくれ」と言うのです。

切断患者の包帯は出血するから開けるなど軍医に強く言われていました。しかし確かにカサカサ音がします。気持ちが悪くためらっていたら「痛いよ痛いよ」と訴え続けます。気休めに形だけ解くことにし血と膿でべっとりした包帯をコワゴワ解きました。そしたら太った蛆が三、四匹這っているんです。

悲鳴の出るのをぐっところえました。蛆を払い落とし

「何もいせん包帯が汚れて痛むのでしょう今日は包帯交換日ですからそれまで我慢しましょうね」と包帯を元に戻しました。

直撃された十四号壕

上地百子(現・与那覇百子)当時十七歳

「ドカーン」と物凄い音でした。

何だか気になって自分の十四号壕に急いで戻ったんですよ。そしたらもう大変。壕の入口が無くなっているんですよ。今しがた出て来たばかりだのにと胸騒ぎを押さえながら探していたらやっとな崩れた穴が見つかったんですよ。

中に入りましたらなんと上地貞子さんや看護婦達が壕の壁にペタッと貼り付いたままになっているんです。奥に入ってまたびっくりしました。本当にもうどうしたことでしょう。地獄絵でも見ているようで恐ろしい光景です。

「よくなったもうじき部隊に帰れるぞ」

と喜んでいた兵隊達が皆ペタツとなぎ倒されているんですよ。手足は千切れ頭も吹っ飛んでいるんです。

貞子さんは脳みそが飛び出しているし看護婦も腸が全部とび出しているのです。寝台にいた患者達も手足や頭が吹っ飛んでそこら中いっぱい肉の塊が散らばっているのです。

全滅状態でした。私はただ恐ろしくいたたまれなくなって壕を飛び出し逃げました。

投降した日本人も虐殺

(投降した住民の収容所に)十数人の日本兵がやってきて、私たちをたたきおこし浜べに集めました。避難民を砂浜に座らせ「オマエらはこれでも日本人か、アメリカの捕虜になって恥ずかしくないのか!」といったようなことをわめきたてました。私は4人の子供を脇とひざに抱えるように座っていました。兵隊の中から「用意はできたか」というどなり声がきこえ、「一、二、三」のかけ声とともに手りゅう弾が私たちの中に投げ込まれたのでした。その一発で信子と文子は即死しました。信子ははらわたがあふれ出していました。そのあともう一発投げこまれたということですが、私の記憶にはありません。

「集団自決」をこころに刻んで(渡嘉敷島の実話)

手榴弾は多くが不発に終わりました。(しばらくすると)一人の中年男が一本の小木をへし折っているのです。彼は自分の愛する妻子その小木で狂ったように殴殺しはじめました。

(それに導かれるように)私たちは愛する肉親に手を掛けていきました。剃刀や鎌で頸動脈を手首を切ったり、紐で首をしめたり、こん棒や石で頭部を叩くなどさまざまな方法がとられました。母親に手をかしたとき、私は悲痛のあまり号泣しました。

私たちは「生き残る」ことが恐ろしかったのです。わが家は両親弟妹の4人が命を断ちました。

若い者、女性、老人など弱い者、若い者の命を先に処理してから、男たちは死んでいくという手順があったように思います。愛するものを放置しておくということは、もっとも恐れていた「鬼畜米英」の手にゆだねて惨殺させることを意味したからです。「生き残ったらどうしよう」ということへの恐怖は頂点に達しました。

「ガラビ・ヌヌマチガマ」より衛生兵の証言

衛生兵の仕事

その他の衛生兵の仕事としては、トラックで夜、どんどん負傷者来るでしょ。それを今度一人一人担架に入れるのが衛生兵さ。患者の輸送、それから搬出。死体を今度外へ出して埋めないかん。埋めるといっても穴掘るわけじゃないんだ。艦砲で穴あいているでしょ。そこへ投げ入れるだけ。そして投げてまた、しばらくして行ってみると埋まっているんだ。艦砲があたって埋まっているんだ。でまた新しい穴空いて、そこに投げる。それしかないんです。だから衛生兵は患者入れる、投げる、そして食料の調達、それだけが毎日の仕事。それだけでも手一杯なんです。疲れて。1000名の食料といたらね、これは一俵、二俵じゃ間に合わんからね、米も。

病院の状態

患者の中には、足、手、ブラブラになっただけでショックで死ぬ人もいますしね、人間ってそういうものですわな。もう自分の手がブラブラなっていたらショックで、それで死んでしまうんですな、心臓がおかしくなって。あの洞窟の中に、異様な声を張り上げて走って歩く負傷者がいたりね。もうきちがいみたいになってしまっ、それが静かになったなど見てみたらね、誰も見て見ないふりしてそっぽ向いているのだけど。足場悪いでしょ、中。そこ走っていくもんだから、今度は足元くるって逆さまにあそこに落ち込むんですよ、岩石の間に。それ誰も助けませんですよ。そのまま死んでいるんですわ。でもそれもしょうがないですよ。ときどき今後はドカーンって自決するやつね、自決する人がいたりね。もう末期症状というのかな、ひどくなってね。五月の中旬から以後、もう軍医が手回らないんですよ、すでに。もう手当どころじゃないのです。

ガラビの青酸カリ

初めね、青酸カリみんなに飲ませろとよこしたのはさ、紙包みなんです。白い粉入った。これで、効くと思ったんです、僕らもね。だからバケツにね、水一杯入れてね。それに青酸カリみたいなやつを入れましてね。ひしゃくでかき回して、それ持って寝ているところに持って行って、「この中に青酸カリ入っているぞ」と皆に言ったんです。「アメリカ来ていてももうどうしようもないんだ、おまえたちはいさぎよく死んでくれ」と、「俺たちもすぐ後から行くから」と言ってね。

だけど、それが効かないんです。一人も死なない。随分いるのに。「誰も死にません」って言ったさ。そしたら「お前ら銃で殺せ」って言ったわけさ。

そしてG伍長呼んでね、二人で小銃はね、一丁か二丁はあったんですわ。それに弾。そして軍医殿にね、俺「酒ください」って言ったわけさ。軍医殿酒飲んでいたの覚えていたわけさ。酒まだ残っているやつを出してくれてね。まず私ラップ飲みましてね。それからG伍長も取ってね、黙って飲んでね。それから今度一人一人銃で撃ったんですけど、そ

の時の表情、今でも記憶ありますよ。(中略)

それでも必死になって逃げようとする奴もいるし。目めがけて打つんです、そうすると脳漿がこうパーッとかかってくるんですよ。下はベトベトさ、頭の脳みそで。

ひどいですよ、G 伍長というのは気が立ちちゃってね。ぼくは最初ね、彼が打って僕が弾渡ししたんですわ。側にいてね。そしたらね。彼が興奮しちゃってね。体動いていないのに手だけが地べた這って逃げようとしている奴がいるわけさ。そういうの見たらね、「貴様このやろう」と言ってね、銃逆さまに持ってね、台尻で頭殴りつけるのさ。「いさぎよく死ねっちゅー」、と言わんばかりだよ。G 伍長にしたらね。そういうような状態で一人一人殺していった。今でも一人一人ね、こう思い出しますよ。

「血であがなったもの」～鉄血勤皇師範隊の沖縄戦 より

元沖縄県知事太田昌秀著

子供の頃から順を追って、過去の記憶の一つひとつまでが、透明な水面にうつしたようにありありとよみがえってくる。それらはすべてが明るい希望に充ちた日々であり、若さと情熱にあふれるものばかりだった。およそ苦しいとか悲しいとかとはかけはなれ、どの一頁を取り出して見ても、不思議なほど光り輝いているのだ。息苦しい非常時局の時代に生まれ合わせても、とりわけ不満に思ったことはなく、私も一人の学生として教師の教えるままに、何らの矛盾を感じることもなく、自己の身命は天皇陛下のため、国のために捧げるべきものと信じ、その日のためにひたすら心身の鍛錬に励んできた。(中略)

それらのことがすべて真直ぐに破局への道へ続いていったとは、どう解釈したらいいのだろうか。自分が戦争という予想もできなかった現実には投げ出されて、目撃したり、聞いたたり、感じたりしたものはいったい何だろう。

戦場における行為の一つひとつが、大きなひろがりをもって自分に立ち向かってきた。〈お前は盗みを働いた〉この声は鋭い刃物のように私の心に突きささった。〈戦争じゃないか〉〈生きるか、死ぬかの時なんだ〉懸命になって弁解しようとする声の下から、生まれて初めて盗みをしたという意識が執拗に私の心を苛んだ。あげくの果て、生き延びたという喜びも、満腹の陶酔感も、かえって自己譴責の責具に変わり、私をこの上なく不安に陥れた。

食べ終えたばかりの飯のにがり、いつまでも歯ぐきに残っているように、罪の観念が私を捉えて離さなかった。眼を閉じ、眠ることによって、すべてのことを忘れようと努めればつとめるほど、目も心もひときわ冴えて、再び想いに沈むばかりである。

〈国のため、陛下の御ために死ぬ〉(中略)——これまでは一点の曇りもなく、そう考えるのが当然の務めだと考えていたことが、どうしてこんなに気にかかるのだろうか。(中略) 私の生涯は一体どんな意味があったのだろうか。何のために、また何か故に、私の幼ない頃からの多くの希望と生活が、かくも無残な悲劇に結びつかなくてはならないのか？

私たちは、華々しい特攻隊員の死に方に憧れ、自らを異常に興奮させ、鞭撻してきたのではなかったか。だが、その装いは華麗でも、死は「死」でしかない。私は戦野をただ生命の本能に翻弄されて彷徨っただけなのだ。と思うと、今さらのように「死ぬこと

は全ての終わりです。死んではいけません」と首里で聞いた内間さんの言葉が、強い情感を伴って思い浮かんできた。

何をあがない、何に報いるための死なのか。ここで死んだ多くの人びとは、一体どんな素晴らしい働きをしたというのだ。虜囚の辱しめを怖れ、飢餓に倒れ、蛆や蠅のような下等なものに食い荒らされる。さもなければ、いたずらに敵の砲弾という無生物と引き換えになっていく。生き延びた者は、敗残の身を醜く岩陰に横たえ、明日も知らずにいる。これでも国が救われ、大君が安らかに眠れるだろうか。

では戦に勝ったとする。勝つとは何か。勝利をおさめる過程で山積する多大の犠牲を支払って得られるものは何か。無数の死体の上にもたらされる人間の幸福というものがあるであろうか。あるとすればそれはなに人の、そしていかなる種類のものか。累々と海水に浮かぶ人間の死骸と国体の護持ということとはどうつながるのか。

同じ死ぬならもっと価値のある死に方はないものか。これら名もなき兵士たちの父母や妻子は・・・私の頭は混乱してきた。自分ももっと秩序立てて静かに物を考えてみたい。

〈お前はいかなる国においても、いつの時代にあっても犠牲を伴わぬ進歩や発展を思い浮かべることができるか。お前は敗戦という現実には、心をかき乱されているのだ。〉こんな声も聞こえてくる。私は胸苦しくなった。生き延びてこんなに苦しむくらいなら死んだほうがましだとまで思う。沖縄戦が終われば、次は本土決戦だ。無数の米軍機が沖縄からとび立ち、日本本土を襲うとしたら・・・私は慄然とした。いや、もう既に敵の翼は本土の上空を覆いつくしているかも知れないのだ。ひょっとしたら誰も彼もが、何か得体の知れぬものに幻惑されて、誤った道を歩いてきたのではないか。この一語が、落雷のように私の心を貫いて過ぎた。私は何事もよくつかめぬまま、その夜をまんじりともせず明かした。

<沖縄の基地について>

<沖縄の基地>

アメリカは沖縄戦の途中、本土進攻のために、次々と基地を建設した。そして終戦後も銃剣とブルドーザーによって強制的に土地を接収して、基地を拡大強化し、平和な島は基地の島へと変貌した。国土面積のわずか0.6%にすぎない狭い沖縄県に、全国の米軍専用施設面積の約75%が集中している。

<基地被害>

米軍の軍事優先政策は、住民の人権無視、軽視へとつながり、多くの事件・事故が発生した。米兵による交通事故、殺人事件、暴行事件など戦場さながらの事件・事故が多発した。また、被害者への補償、犯人の処罰などうやむやにされたケースが多い。

【由美子ちゃん事件】

昭和30(1955)年9月3日、石川市に住む永山由美子ちゃん(6歳)が米兵に暴行・殺害され、嘉手納海岸で死体となって発見された。この事件に住民の怒りは頂点に達し、立法院でも「鬼畜にも劣る残酷な行為」と抗議決議をし、米軍は厳罰に処罰するとの声明を発表、沖縄での軍法会議では死刑判決がでたが、犯人は本国送還となりうやむやにされた。

【宮森小学校ジェット機墜落事故】

昭和34(1959)年6月30日に発生した宮森小学校へのジェット戦闘機の墜落は死者17人、重軽傷者121人という米軍基地関連の事故としては日本国内でも最大の事故であった。

【国場君竣殺事件】

昭和38(1963)年2月28日、下校途中の中学1年生国場英夫君が青信号で横断歩道をわたっていたところ、信号無視で突っ込んできた米兵の運転する大型トラックにひかれ死亡した。加害者は軍法会議で無罪となった。

【隆子ちゃん事件】

昭和40(1965)年6月11日、落下傘を取り付けた米軍のトレーラーが投下目標をはずれ、読谷村の民家近くに落ち、庭先で遊んでいた棚原隆子ちゃん(当時小学校5年生)が死亡した。

<嘉手納基地>

嘉手納飛行場は、A・B二本の滑走路をもつ西太平洋最大の米空軍基地。F15 戦闘機やP3C 対潜哨戒機、B52 戦略爆撃機が飛来する。

過去には朝鮮戦争、ベトナム戦争のときの前線基地に使用され、最近では、湾岸戦争の前線基地として使われた。戦略攻撃、救難、指揮・管制などの総合拠点の性格をもつ、危険性の高い戦略基地である。同時に、約2万人の軍人・軍属とその家族が居住し、兵舎や家族住宅の他、診療所、教会、学校、映画館、ゴルフ場、PX(売店)などがあり、さながら「リトルアメリカ」を形づくっている。

これにひきかえ、嘉手納町は町の面積の83%を基地にとられ、町民約1万5000人はわずか17%の狭い場所での生活を強いられ、典型的な「基地の町」となっている。

<思いやり予算>

在日米軍駐留経費で日本政府が負担しているのが「思いやり予算」で、2007年度2173億円

<1995年10月21日 県民総決起大会の高校生代表のあいさつ（一部）>

沖縄県立普天間高校3年 仲村清子

私はごく普通の高校三年生です。たいしたことは言えないと思いますが、ただ思ったことを話します。
～略～

沖縄で米兵による犯罪を過去までさかのぼると、凶悪犯罪の多さに驚きます。戦後50年、いまだに米兵による犯罪は後を絶ちません。このままの状態でもいいのでしょうか。どうしてこれまでの事件が本土に無視されてきたのかが、私にはわかりません。

まして、これまでの米兵による事件で、加害者の米兵が罪に相当する罰を受けていないことには本当に腹がたちます。米軍内に拘束されているはずの容疑者が、米国に逃亡してしまうこともありました。そんなことがあったからこそ、今、沖縄の人々が日米地位協定に反発するのは当然のことだと思います。～略～

基地が沖縄に来てからずっと犯罪は繰り返されてきました。基地が在るゆえの苦悩から私たちを解放して欲しい。だって、今の沖縄は誰のものでもなく、沖縄の人のものなのだから。

私が通った普天間中学校は、道を隔てたすぐそばに米軍の基地が在ります。普天間第二小学校は運動場のフェンス越しに基地が在ります。このように基地の周りには、七つの小学校と四つの中学校、三つの高校、一つの養護学校、二つの大学があります。私の家からは、米軍の飛行機が滑走路に降りていくのが見えます。それはまるで、街の中に突っ込んでいくように見えるのです。

ニュースで爆撃機やヘリコプターなどの墜落事故を見るたび、もしこれが学校だったならと、胸が騒ぎます。

機体に刻まれた文字が読み取れるほどの低空飛行、それによる騒音。私達は今まで基地が在る事をしょうがないことだと受け止めてきました。しかし今、私たち若い世代も、あたり前だった基地の存在の意味を見返しています。学校でも意外な人がこの事件についての想いを語り、みなをびっくりさせたりしました。それぞれ口にはしなかったけれど、基地への不満が胸の奥にあったことの現れだと思います。

今日、普天間高校の生徒会は、この大会のために用意されたバスの無料券を全生徒に配り「みんなで行こう、考えよう」と大会への参加を呼びかけていました。浦添高校の生徒会でも同じような活動が行われたそうです。そして今ここにはたくさんの中高生や大学生が集まっています。若い世代もこの問題について真剣に考え始めているのです。

今、このような痛ましい事件が起こったことで、沖縄は全国にこの問題を訴えかけています。私は今、決してあきらめてはいけなと思います。私たちがここであきらめてしまうことは、次の悲しい出来事を生み出す事になるからです。

いつまでも米兵におびえ、危険にさらされながら生活を続けていくのは、私は嫌です。

未来の自分の子供たちにも、そんな生活をさせたくありません。私達生徒、子供、女性など弱い存在に犠牲を強いるのはもうやめてください。

私は戦争が嫌いです。だから人を殺す道具が自分の周りにもあるのも嫌です。

次の世代を担う、私達高校生や大学生、若者の一人一人が嫌だと思ふ事を口に出して、行動していく事が大事だと思います。

私達若い世代に新しい沖縄のスタートをさせて欲しい。沖縄を本当の意味で平和な島にして欲しいと願います。

そのために私も一歩一歩行動していきたい。

私達に沖縄を返してください。軍隊のない、悲劇のない平和な島を返してください。

1995年10月21日

県民総決起大会 高校生代表あいさつ 沖縄県立普天間高校3年 仲村清子

私はごく普通の高校三年生です。たいしたことは言えないと思いますが、ただ思ったことを話します。

～略～

沖縄で米兵による犯罪を過去までさかのぼると、凶悪犯罪の多さに驚きます。

戦後50年、いまだに米兵による犯罪は後を絶ちません。このままの状態でもいいのでしょうか。

どうしてこれまでの事件が本土に無視されてきたのかが、私にはわかりません。

まして、これまでの米兵による事件で、加害者の米兵が罪に相当する罰を受けていないことには本当に腹がたちます。

米軍内に拘束されているはずの容疑者が、米国に逃亡してしまうこともありました。

そんなことがあったからこそ、今、沖縄の人々が日米地位協定に反発するのは当然のことだと思います。

～略～

基地が沖縄に来てからずっと犯罪は繰り返されてきました。基地が在るゆえの苦悩から私たちを解放して欲しい。

だって、今の沖縄は誰のものでもなく、沖縄の人のものなのだから。

私が通った普天間中学校は、道を隔てたすぐそばに米軍の基地が在ります。普天間第二小学校は運動場のフェンス越しに基地が在ります。

このように基地の周りには、七つの小学校と四つの中学校、三つの高校、一つの養護学校、二つの大学があります。

私の家からは、米軍の飛行機が滑走路に降りていくのが見えます。それはまるで、街の中に突っ込んでいくように見えるのです。

ニュースで爆撃機やヘリコプターなどの墜落事故を見るたび、もしこれが 学校だったならと、胸が騒ぎます。

機体に刻まれた文字が読み取れるほどの低空飛行、それによる騒音。

私達は今まで基地が在る事をしょうがないことだと受け止めてきました。

しかし今、私たち若い世代も、あたり前だった基地の存在の意味を見返しています。

学校でも意外な人がこの事件についての想いを語り、みなをびっくりさせたりしました。

それぞれ口にはしなかったけれど、基地への不満が胸の奥にあったことの現れだと思います。

今日、普天間高校の生徒会は、この大会のために用意されたバスの無料券を全生徒に配り「みんなで行こう、考えよう」と大会への参加を呼びかけていました。

浦添高校の生徒会でも同じような活動が行われたそうです。そして今ここにはたくさんの中高生や大学生が集まっています。

若い世代もこの問題について真剣に考え始めているのです。

今、このような痛ましい事件が起こったことで、沖縄は全国にこの問題を訴えかけています。私は今、決してあきらめてはいけないと思います。

私たちがここであきらめてしまうことは、次の悲しい出来事を生み出す事になるからです。

いつまでも米兵におびえ、危険にさらされながら生活を続けていくのは、私は嫌です。

未来の自分の子供たちにも、そんな生活をさせたくありません。私達生徒、子供、女性など弱い存在に犠牲を強いるのはもうやめてください。

私は戦争が嫌いです。だから人を殺す道具が自分の周りにあるのも嫌です。

次の世代を担う、私達高校生や大学生、若者の一人一人が嫌だと思ふ事を口に出して、行動していく事が大事だと思います。

私達若い世代に新しい沖縄のスタートをさせて欲しい。沖縄を本当の意味で平和な島にして欲しいと願います。

そのために私も一歩一歩行動していきたい。
私達に沖縄を返してください。軍隊のない、悲劇のない平和な島を返してください。

当時のままの文章で載せています。